

変える・守る・育てる・創る

女だから経営論

第51回

取材・文 三好かやの



「写真は苦手なの」と、渡辺さん

渡辺久子さん（愛知県・渥美町）

Profile

わたなべ・ひさこ 1955年、渥美町の農家に生まれる。弟の幸祐さんが家業を継ぎ、スプレーギクを栽培していたが、97年8月に突然亡くなり、それまでカーディーラーに勤めていた姉の久子さんが跡を引き継ぐことに。半年間会社勤めを続けながら出荷。その後独自に花の栽培に着手。「3年は食えないだろう」と覚悟の上だった。市場で微生物農法を指導する小久保秀夫氏に出会い、軟弱野菜の栽培を始める。残された施設を生かし、土づくりを進めながら自分流の農業のスタイルを模索している。

愛知県・渥美町は施設栽培のさかな町だ。取材に訪れた3月初旬、高台に登ると、眼下にキャベツ畑とハウスの屋根がどこまでも連なっているのが見えた。ここで最近、本格的に農業を始めたという渡辺久子さんと、ハウスの前で待ち合わせた。

案内してくれたのは小久保秀夫さん。愛知県を中心とする微生物農法の指導に当たっている人物だ。ハウスの主はまだ来ていないのに、彼はずんずん中へ入って、ハサミでチングンサイを1株切り取り、その葉を一枚差し出した。

「このまま根元の白い部分を食べてみなさい」チングンサイを生で食べたのは、初めてである。さぞ青臭かろうと思つて口に入れるなど、意外なことに生でもサッパリ食べられた。

当時久子さんは、カーディーラーに勤務していたので、半年間仕事を続けながら出荷を続けた。そして700坪ものハウスが残された。

幸祐さんは独身で、子どももなかつたし、父親は病気がち。農作業を手伝つていた母に、すべてを任せることにはいかない。引き継げるのは独身で会社勤めしながら、出荷を手伝つていた久子さんしかいない。

身内の間では、一体誰が引き継ぐのかはつきり問いただすことなく、久子さん自身が「私がやります！」と、大々的に宣言することもなかつたという。

60歳を過ぎた母は、機械も使えないし、車にも乗れない。じやあ私がやるしかない、

生でも食えるチングンサイ

のある女性だ。

突然逝った弟のハウスを

「なんとなく」引き継いで…

久子さんが農業を始めるきっかけは、あまりにも突然訪れた。チングンサイのハウスは、元は弟の幸祐さんがスプレー

ギクを栽培していた場所である。

97年の夏、「ちょっと横になる」とい

つて昼寝に入った幸祐さんが、そのまま亡くなってしまった。眠つたまま脳の血管が切れていたのだという。誰にも予測のつかない突然死だった。

「ハウスに花が入つていたんで、私が勤めながら出荷しました」

当時久子さんは、カーディーラーに勤

務していたので、半年間仕事を続けながら出荷を続けた。そして700坪ものハ

ウスが残された。

幸祐さんは独身で、子どももなかつたし、父親は病気がち。農作業を手伝つていた母に、すべてを任せることにはいかない。引き継げるのは独身で会社勤めしながら、出荷を手伝つていた久子さんしかいない。

身内の間では、一体誰が引き継ぐのかはつきり問いただすことなく、久子さん自身が「私がやります！」と、大々的に宣

言することもなかつたという。

60歳を過ぎた母は、機械も使えないし、車にも乗れない。じやあ私がやるしかない、

いかなあ……なんとなく、成り行きですね」

こんな大事なことを「なんとなく」決めてしまっていいのだろうか?

「農家の跡つて、そうやつて継いでいくもんだよ」

小久保さんがそうつぶやいた。

3年は食べていけないと 覚悟を決めて

「やる」と決めてはみたものの、亡くなつた弟と同じ規模でスプレーギクの栽培を続けていくのは、到底無理だ。「弟と私では、労力だけでも3倍ぐらい違いますから。人を5人ぐらい雇えばできかもしませんが……」

当然のことながら、それでは経済的に見合わない。久子さん自身、「3年は食べていけないだろう」と覚悟を決めたという。そんな手探り状態の中、久子さんが最初に手がけたのは、ヒマワリだった。同じ花でも出荷まで何度も消毒を必要とするスプレーギクと違い、ヒマワリは比較的手間もかからず、消毒回数も少なくてすむ。会社を辞めて最初の夏、大量に出荷する予定で作付けた。ところが――

「ちょうどお盆と出荷の時期が重なつてしまつて、弟の新盆だったので、家の方も忙しくて、結局半分しか出荷できずに、残りの半分はハウスで花が咲いて終わり

ました」

せつかく作つても手が足りなくて収穫しきれない。そんなことの繰り返しだつたが、ヒマワリを中心に、花を作つては

チョコチョコ市場へ出荷する日々が2年ほど続いた。

そんな彼女の姿が、市場に来ていた小久保さんの目に止まつた。第一印象は、「ヘンなのが来どるな」。

そもそもこの小久保さん。自分の家で

はミニトマトを栽培しているが、そちらはほとんど妻と息子に任せ、自称「隠居」状態。ご本人は島本微生物農法に基ついた肥料の販売を通して、もっぱら農家の土作りや栽培技術の指導、経営相談に飛び回つている。

かつては慣行農法バリバリでミニトマトの生産に明け暮れていたが、あるときから、これまでの土作りに疑問を抱き、島本微生物農法を取り入れるようになつた。その成果を自分の畑で生かすだけではなく、惜しむことなく他の農家にも伝え続けている。最近は中国政府に招かれ、現地の試験場で技術指導にも当たるといふ、実はものすごい「隠居ジジイ」なのである。

小久保さんは市場へせつせと花を持つてくる渡辺さんの存在が何となく気になり、思わず声をかけたのだという。そんな「市場でナンパ」のような形で2人の付き合いが始まった。

売上の1割は 土への恩返し

小久保「ハモグリバエがおるねえ」

渡辺「そろそろ出でますね」

葉についた白い点は卵である。葉の中

で孵り、筋のような模様を描くことから

「絵描き虫」とも呼ばれる。この絵を描かれると、商品価値がなくなる。

「困りましたねえ。農薬を使わないと、もう少し粘着テープを下げるとか、木酢を使うとか。それが危険性の少ないBT剤を使うんだね。今日の一四是、明日の千匹だから」(小久保さん)



小久保「ハモグリバエがおるね。防虫用の粘着テープを下げないと」
渡辺「あれ、顔にベタッと張り付いちゃうんですよね」

「年取つたお母さんと2人でやつていくのに、キャベツなどの重たい野菜はかな

わんだらうと。軟弱野菜を作つて一日い

くらの収入になる仕事をしてみよう。安定した値段を確保するために、売り込みのお手伝いもしますよと」

小久保さんは、かつてミニトマトの部

会長を務めたキャリアの持ち主で、市場の担当者にも頗がきく。作るだけでなく

売る指導もできるのは、地元の流通事情に長けた彼だからこそである。

「農協や普及所の職員の指導とは、ぜんぜん違います。自分の栽培経験をふまえて指導してくれる」

と渡辺さん。彼の指導は、「お母さん、腰が曲つてきたのに、サヤエンンドウの背

丈が高くなつてきたら、摘むのが大変だ」という具合に、その家の家庭環境やプロ

イバシーまでずんずん踏み込んだ上で、何ができるか一緒に考えるという方針。

裏を返せばここまで家庭の事情に精通しないれば、農家経営のトータルなコーディネイトはできないということだ。同じ農家の間だから、腹を割つて話せる。

また言葉で説明しなくとも事情をわかってくれる。

まるで「市場でナンパ」のような形で出会つた2人だが、最強のアドバイザーが出現したといえるだろう。昨年10月、小久保さんの指導の元、野菜の栽培が始まつた。

ただし渡辺さんのハウスは、大きな問題を抱えている。土を手に取りながら、小久保さんが説明してくれた。

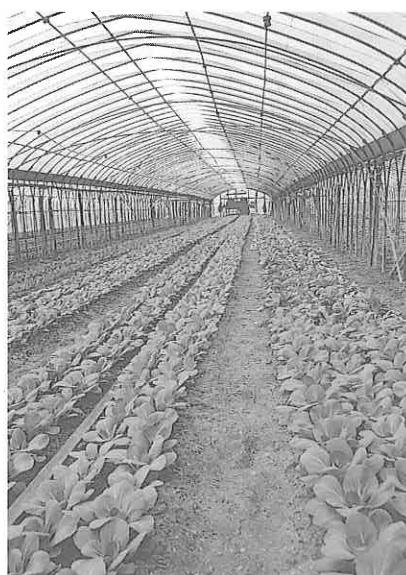
「これまでキクを作っていた場所だから、土が相当疲れている。その上チンゲンサイは作りつづけると、土がものすごく傷む。ハウスの中でも土が塊になっている。これを微生物の力で碎いてサラサラにしていかないと……」

栽培・出荷を続けながら、さらに土作りを併行してやつていかなければ、長くは続けられない。

施設栽培がさかんな渥美半島で、小久保さんは一千万円以上もかけて作ったハウスの土がボロボロになり、ごつそり土を入れ換える。そんな繰り返しを何度も見てきたという。渡辺さんが同じ轍を踏まないためにも、土作りは欠かせない。

「売上の5%を堆肥、さらに5%を肥料にかけて、1割は土へ返す。その範囲の中でどれだけのことができるか。それが土に返せなければ、ただの略奪になってしまう。だったら農業やめちやいなさい」と

そもそも小久保さんの指導法である。野菜を始めたことで、なんとか継続的に収入を得ることができるようになつたとはいえるが、売上はスプレーギクの頃に比べれば、5分の1以下。決して多いとはいえない中から、1割を土へ返していくのは、かなりの負担ではないか?



出荷を待つチンゲンサイ。土作りと並行して栽培を進めている

でも、キクのときはもーっと肥料と農薬を使つてましたから」

り組んでいる。

私自身、男手なしで栽培に取り組む彼女たちは「特例」だと思つていたのだが、

野菜を組み合わせて栽培・出荷していく予定だ。

元々渡辺さんは、生け花を習つていて

師範の免状も持つてゐるほど。以前は自分で作つた花を、師匠の元へ届けていた。

——この夏に向けて何を作りますか?

「ヒマワリ。モネっていう八重の品種を作ろうと思つてます」

——えっ? 生け花の世界でもヒマワリ使うんですか?

「使いますよ。どんどん新しい花も入ります」

渡辺さんは、以前は自家用に無農薬で野菜を作つたが、小久保さんの指導を受けるようになり、「野菜がやさしくなつた」と感じるようになった。なぜかはよくわからないが、とにかくそう感じるのである。冒頭で私が食べた「生でも平気なチンゲンサイ」もそのひとつ現れだろう。ホウレンソウもエグみやゴワつきを感じない「やさしい」ものがでるのだという。

収量や売上は確実に落ちる。それでも規模を縮小したり、作目を変えたりして「絶やす」ことなく自分流のやり方を編み出し、なんとか農業を続けていく力は、女性の方が強いのかもしれない。

弟さんが亡くなつて3年半。出荷量が多いときは、夜中に袋詰をすることもあるそうだ。

「友だちの誘いを断れなくて、帰つてから始めるから遅くなつちゃうんですけど（笑）

これまでさまざまな苦労もあつたことと思うのだが、それに関しては多くを語らない。語つたところどうにもならない。今、自分にできることを精一杯続けただけ、そんな潔さが伝わってくる。

労力的なことを考えても、ハウス全体で野菜を作るには無理。これからも花と

期せずしてここ3回連続で「ひとりで農業」をやつている女性を取り上げた。福島の永山乃里江さんは「やりたい」一心で大豆の栽培と加工に取り組んでいる。兵庫の溝口洋子さんは突然夫を交通事故で亡くし、残された和牛の肥育に取

てキュッと引き締まつた蓄が一気に明るい花を咲かせる「今風のカッコイイ」ヒマワリである。

出荷前はジャンケンの「グー」のように小さな握りこぶしを握り締めたような緑の蓄をつけたまま、ズラリと並んで市場へ送り出す。

「それが、お客様のところでパートを開くんですよ」

残された施設をフルに生かし、最強のアドバイザーに見守られながら、渡辺さんの新しい農業は、まだ始まつたばかりだ。

野菜を始めたことで、なんとか継続的に収入を得ができるようになつたとはいえるが、売上はスプレーギクの頃に比べれば、5分の1以下。決して多いとはいえない中から、1割を土へ返していくのは、かなりの負担ではないか?

「それが、お客様のところでパートを開くんですよ」

残された施設をフルに生かし、最強のアドバイザーに見守られながら、渡辺さんの新しい農業は、まだ始まつたばかりだ。